

■ ■ 種々な人の話（一一話） ■ ■ = = = ⇒三州横山話より

■ 昔を語る老翁 ■

字滝川の滝川兼松という老翁は、七年前に亡くなりましたが、記憶のよい男で、一度聞いたことはかならず忘れぬというほどで、滝川と横山の昔のことは、どんなことでも知らぬことはなかったそうで、酒が好きなので、酒を呑ませると、楽しそうに昔の事を諄々と話して聞かせたと言うことです。家が貧しくて、悲惨な最期を遂げたと言うことですが、この老人に、一度ゆっくり遇って話を聞く機会のなかったことを、ことに残念に思います。

記憶が確かと思ったことは、日露戦争の始まった当時、ロシアの内地からシベリア地方の地名や、また人名などを、明瞭に暗礁しているのに、子供心に驚いたことがあります。

■ 一本足の男 ■

村のものが山雀と呼んでいた爺さんは、一本足に下駄を履いて、釣竿と魚籠を持って、前の寒狭川に釣りをしていました。

岩から岩を、山雀が撞木を渡るような格好で飛んで歩くので、山雀という名前があるとも言いました。夏はあまり見かけたことを聞きませんが、冬の寒い日にはよく見かけました。今そこにいたと思ったら、もう五、六町も川上で見たなどと言いました。親しく口を聞いたことも聞きません。また里の道を歩いているのを見かけたことも聞きません。川に沿って、どこかへ行ったようです。久しぶりに今日は山雀を見たなどと言ってから、もう来なくなりました。

■ 水潜りの名人 ■

ショウビン（翡翠のこと）と呼ぶ爺さんは水潜りの名人で、村で溺死人の死体が見つからぬときは、最後はかならずこの爺さんが頼まれて来ました。水底に潜って行って、三〇分ぐらいは浮かんで来なかったそうです。その間に水底で二回呼吸をすとも言いました。どこのものともわからず、村に近く、どこかしらに遊んでいたものだそうですが、三、四年前、村に身投げ女があつてその死体が知れなかったとき、村のものがだんだん尋ねて岡崎まで行って聞くと、一〇年ほど前に死んでしまったと言うことでした。

ショウビンは、ポンだと言う人もありました。

■ ポン ■

夏から秋にかけて、ポンが前の寒狭川の河原に来て、幾組も天幕を張っていました。またこれをポンスケとも言いました。日が暮れてから急に雨が劇しく降って来て、河の水が大変増えたから、ポンの天幕はどうしたろうなどと言って、行って見ると、もうどこへ行ったのか、影も形も見えませんでした。男は毎日魚や亀を捕り、女はヤスを売って歩いたり、乞食をして歩いたりしていました。

ポンが来ると、私たちが散々荒らしてしまっ、鰻など一つだっていないと思うような、小さな流れから、幾つでも鰻を捕らえました。鰻の穴を探すにも、眼で見ないで手で探るようでしたが、針を穴に入れてやったと思ったらすぐ下げだしました。

一年ごとに減って行って、近来では天幕を張っているのをさらに見かけなくなつたと言います。

■ 犬をつれて山にいる男 ■

村のものから犬乞食と呼ばれていた男は、小さな犬を幾つも連れて歩いていましたが、人の門に立って乞食をしたことは聞きません。ある日、この男が山から出て来るのを見て、鈴木智恵松という男が、何のために犬を連れてくるのかと聞いたたら、寒い晩に蒲団の代わりにすると答えたそうです。痩せ型の背の高い男で、眼白や山雀などを一つの籠に沢山入れて提げて行くのを見たなどと言いました。

近来は、減多に見なくなつたと言いますが、二、三年前立派な服装をして、豊橋の町を通つたのが、犬乞食に違いなかつたというような話を聞きました。

■ 山小屋へ塩を無心に来た女 ■

出沢村の鈴木戸作という男の話でしたが、あるとき北設楽群の山小屋で仕事をしているところへ、木の葉などを綴り合せたぼろぼろの着物を着た女が、塩を無心に来たから、どこの者だと聞くと、紀州だと答えたそうです。

またある男は同じような姿をした坊主が、塩を無心に来たのに出遭つたと言いました。

■ 鯉亀 ■

鯉亀という爺さんは、本名を早川亀太郎と言って、もう六年ほど前に亡くなりましたが、ふだん魚を捕ったり、籠をこしらえたりしていました。無論百姓もしましたが、村の生砂神の神主の代理もやっていました。屋敷の内へ池を造って鯉を飼っていたので、鯉亀という渾名がついたと聞きました。夏は無論のこと、冬、人の魚を余り捕らぬときに、大仕掛けなことをして魚を捕って行くので、他の村へ行くと、

横山のポンがきたと言われたそうでした。この爺さんが一生の中に、一番大きいと思われる魚を捕ったのは、長篠の水神下と言うところで、夜網にかかった鱸すずきで、筵を縦に折って包んでも、まだ頭と尻尾が出ていたと言うことでした。鳥の大きな奴は、熊鷹の大きいのを見たことがあるが、なにぶん空を高く飛んでいるので、判然とは言えないが、そのあとに随ってゆく、たくさんの鳥や、鳶が普通の鳶と小雀ぐらいの比較に見えたと言いました。二回ばかり宙を廻って北の方へ飛んで行ったと言います。

■ 湯に入らぬ男 ■

山口伊久という男も、魚を捕ることが好きで、夏は、鮎滝に行けば、如何なる日でもいると言いました。どんなに燻けつくような炎天でも、じっと身動きもしないで、鮎ももひきを捕っていると言いました。いつも股引きやはんに脚絆を肌から離さず、湯には一年も二年もはいらぬという評判でした。それでいて顔の色はいつも艶々していました。あまり家計が豊かでもないのに、百姓は嫌いだといって、夏川へ行くほかは、山へ行って、木を伐ったりカワタケをとったり、またフシの実を探したりしていました。家の中はきれいに掃除して、塵一本もないようにして、多くは炉に向かってじっと座っていました。

■ 馬に崇られた男 ■

ハヤセの梅という男が、三月神楽の連中に混ざってかならずやって来ました。始終口から涎を流している、五〇恰好の赤ら顔の男でした。馬が死んだ、赤馬が死んだぞと言うと、自分の二の腕に喰いついて、泣きながら、声の主を追いかけて行きました。そのため二の腕はいつも赤く腫れあがっていました。その後死んだといっ
て来なくなりましたが、近くの物持ちの家へ生まれ変わって来たとも言いました。

■ 木の葉を喫う男 ■

山口豊作という男は、三年前に亡くなりましたが、大変つましい男で、一〇年ほど前までは、石油を使うのはもったいないと言って、昔のままの松を、明かしの燃やしていました。煙草が好きで、ふだん口から煙草を離しませんでしたが、煙草が官営になってからは、買っては喫まないで、秋、霜が来てから、山へ行って種々な木や草の葉を採って来て、煙草のように、縄にはさんで、天井に吊るしておいて、それを刻んで喫んでいました。

山牛蒡の葉や、虎杖の葉や、蓼の葉、ゴード茨の葉などが喫めると言いました。

桑の魯桑という種類も色がきれいだと言いました。赤松の葉を煮出して、石の上で叩くと刻煙草のようになることもその男から聞きました。

■ 死ぬまで縄をなつた男 ■====⇒三州横山話より

私の祖父の弟で、遠江の堀の内にはいた夏目周吉という男は五年前（大正五年頃）に亡くなりましたが、若い時から律義者で、また大変な儉約家であったそうです。

若い頃、親類の家に厄介になっている時など、盆と正月に、廻礼に行くのに、家を出る時は着物に羽織を着て出かけても、途中、村を出はなれて家のないところへ来ると、さっそく羽織を脱いで、棒切れを拾ってその先に引っかけて、それをついでいって、人家のあるところにさしかかると、再びその羽織を着て歩いたと言いました。盆に廻礼する時などは、村はずれの村の入口まで、着物を脱いで、やはり棒の先に引っかけて、禪ひとつになって歩いてきたそうです。祖母がよく言って笑いましたが、七十幾歳になって、私の家へ毎年墓参りに来るのに、その男が二十の年に、叔母から貰った着物を着て来ると言いました。

この男が年を老って、死期が近づいた二、三年は、ボケてしまって、朝起きると、その日の天候を家のものに訊いて、三州へ墓参りに行かなくてはならないと、ひとり諾いては土間へ降りて草履を造るのが日課であったそうですが、草履に緒を付けるのを忘れてしまって、二尺ほどもある長い草履を幾つも作ったと言いました。

いよいよ臨終という日には、床の中でその日の天候を訊いて、手に唾をつけては、しきりに縄を緲う真似をしていて、最後に息を引き取るまで、その手つきは休めないうで、安らかに息を引き取ったと言います。